

「歌姫・熊彦ものがたり」

うたひめ

くまひこ

(管生の滝にまつわるお話)

小倉南区

むかし、香月の里に歌姫という美しい一人の娘がおりました。里の者たちは、みんな歌姫の美しさと心のやさしさをほめたたえていました。

なかでも、熊彦という若者は、心から歌姫のことが好きでした。ところが、歌姫は、里一ばんのお金持のむすめ。熊彦は、びんぼうな百姓でしたから、いくら歌姫が好きでも、めったに会うことすらできません。

ある春の夜のことでした。

熊彦は、歌姫への思いを歌にこめてたんざくに書き、そのたんざくを姫の屋敷の梅の木につるしました。

たんざくの歌を読んだ歌姫は、だれかはわからないけれどその歌を作った人が好きになりました。

このことを知った金持のむすこツタマロは、歌を作ったのは自分であるとうそをついて歌姫と結婚しました。

悲しみのあまり、熊彦は、企救の山奥にはいり、滝に身を投げました。

このことがあってから、歌姫は毎夜、高い熱になやまされる重い病気になりました。

ある夜、姫は夢を見ました。

山の中の滝つぼに身を沈めたら、たいへん気分がよくなる夢です。

姫は、その滝に行く決心をしました。

夫のツタマロは心配し、古老に相談しました。

「それは、歌姫どのが、その滝の白へびに見こまれているからじゃ。行かせなき。でも、顔に墨をぬって行かせるがよからう。そうすれば

白へびも姫とは気がつくまい。」

とおしえてくれました。

翌朝、歌姫は顔に墨をぬつてでかけました。

やがて、目ざす滝にやつてきました。

歌姫が滝つぼのそばまでくると、水しぶきがどんぐり、せつかく顔にぬつていた墨がきれいにおちてしましました。

そして、美しい姫の素顔すがおがしぶきにぬれてますます美しくなつていくのでした。

それとも気づかず、姫は夢中むちゅうで「きれいな滝」と感心かんしんしながら、からだを冷ひやそうと片足かたを滝に近づけたそのとき、滝つぼの水がふくれあがつて白へびがあらわれ、姫のからだを巻いて、あつといつ間に滝つぼの中ふかく入つてしましました。

それからというものは、化粧けしょうした女が、この滝に近づくと、滝しぶきがはげしくなつて、みるみるうちに化粧がおちて「素顔」になるということで、「素顔の滝」と呼ばれるようになつたということです。

それがいつのころからか「菅生の滝」とかわって今まで続つづいているということです。

